

会員寄稿

やさいづくりの記

—亡き母への想い—

佐藤 弘（昭和40年機械科卒）

東京秋工会 幹事



《幼少のころ》

6人兄弟の末っ子に生まれた私は大変な甘えん坊で、乳離れしてからも母の姿が見えなくなると大声で泣き続けるため、もの心つく前から、遊び場と言えば家の周りの畠だったようです。母から聞いた話では、這って危ない所へ行かないように、畠に丸木の柱を立て、私を長い紐で犬のようにつないで農作業をしていたそうです。もの心がついてからも、近所に同年代の男の子がいなかったこともあり、母と一緒に畠に行っては、おもちゃのシャベルのようなものを作つてもらい、母のまねをして畝を作り、種を蒔くまねごとをしていました。このことは私が小学校に入り、新しく友達ができて、その子達と遊ぶようになるまでずっと続きました。その母も、昭和51年に66歳で亡くなりましたが、あの畠で母と一緒に過ごした情景は、懐かしい甘酸っぱさと一緒にくっきりと心の中に残っている、いわば私の原風景です。

《就職、そして転勤》

昭和40年、故郷を後にして上京しました。就職した日立製作所武蔵工場は、武蔵野の面影が色濃く残る東京都小平市にありました。工場の周辺には畠や森が点在し、風向きによっては肥やしの匂いが漂ってくるような、田舎者の私にとっては、カルチャーショックを受けることの少ない、大変ありがたい環境でした。私は暇があれば、独身寮の屋上から周囲の畠を見渡しては、故郷の風景や母に思いを馳せておりました。

工場の周辺も農地が少なくなり、都会化が進み始めた昭和45年、大変嬉しいことに、社命で上州高崎へ転勤することになりました。日立の高崎工場は高崎市の郊外にあり、すぐ側を関越自動車道が通っているとはいえ、田んぼや畠の真ん中にそびえ立っていて、私にとってはまたまた最高の環境でした。そして、高崎転勤の翌年、私は所持を持ち、同時に借金をして持ち家をしました。新居の周りには水田や桑畠が多く、田植え時期になると毎晩蛙の大合唱が聞こえてきて、田舎を思い出させてくれました。

《土地を借りる》

就職してから50代後半までは、一貫して会社が大変に繁忙であったため、殆ど休む暇もない状況でしたが、定年が近づいてくるに従って、精神的にも、また時間的にも余裕ができるようになりました。そして、そのころから、母と一緒に過ごした畠での土いじりの日々をしきりに思い出すようになったのです。

我が家のある近所には、農家の方が年老いてしまい、後継者もいないため、雑草が生える任せた、いわゆる耕作放棄地と呼ばれる畠地が増えました。そこで、ある地主さんに「あの土地を貸していただけませんか？」とお願いしてみました。「ああ、好きにしているよ。」と快諾してもらい、無謀にも240坪という広い畠地を借りることにしました。平成16年の夏のことです。

《開墾の日々》

畠地を借りはしましたが、その畠と言うのは、私の胸のあたりまでの丈の雑草が一面に生えており、まずそれを退治しなければなりませんでした。知人から刈払い機を借りて雑草を刈り取り、そして、土中に深くはびこっている草の根を鍬で掘り起こす、ながら開墾です。この作業に7月から8月の(土)(日)を延べ10日費やしました。朝から晩まで、汗ビッショリになって、いつももまして美味しい晩酌のビールだけを楽しみに開墾を続けました。よく続いたものです。

《種蒔きだ!!でも挫折》

8月の下旬、ようやく草が無くなった畠に、まず大根の種を蒔きました。毎日のように水をかけていると、4日目には芽が出てきました。嬉しくなって毎朝早起きをし、出社前に畠に行って水をかけては「早く大きく成れ」と語りかけていました。でも1カ月経っても殆ど育ちませんでした。そこで、書店に行って「初めての野菜作り」という専門書を購入して勉強することにしました。馬鹿な話で、私は事前の勉強も全くせずに、やみくもに種を蒔けば作物は出来てくれると考えていたのです。専門書の冒頭には、要約すると以下のことが書かれておりました。

- ・日本は酸性土が多い。殆どの野菜は酸性に弱いため、石灰を入れて中和しなければならない。
- ・充分な元肥が必要。耕作を休んでいたような畠は、まず堆肥などの肥やしを充分にいれて土作りをすること。
- ・それぞれの野菜には、蒔き時がある、それに合わせて栽培のスケジュールをしっかりとつくること。

これらのことを行なうと守り、その年は土作りに専念しました。

《初めての収穫》

翌年の2月、満を持して、ジャガイモを植え、3月には大根の種蒔きをしました。5月、ますますの春大根が収穫できました。そして6月には見事なジャガイモが沢山採れたのです。かなり感動しました。採れたての野菜で作った味噌汁は、まさにおふくろの味で、懐かしさに浸りました。平成17年春でした。

今回はこのくらいにします。もし機会があれば、私が野菜の作り手として成長してきた歴史を紹介させてもらいます。

《余談です》

「あなたの一番好きな匂いは？」と聞かれたとしたら、私はどうに還暦を過ぎた今も、「それはおふくろの匂いです。」と答えるでしょう。小学校の高学年になるまで、末っ子で甘ったれの私を、一緒に布団で抱いて寝てくれた、あのおふくろの甘い匂いです。末っ子は何歳になんでも末っ子です。



野菜作りの基本、草取り(左)と水やり

